

牛のために ～私の酪農の夢～

岡山県立高松農業高等学校 畜産科学科 3年 安達 萌花

「ガシャン。ドン。バタバタバタ。」

私が高校に入学して初めて乳牛の実習をしたときに、聞こえてきた大きな音。動物が好きで畜産科学科に入り、実習を楽しみに学校生活を送ってきた私には衝撃的な光景でした。他の牛につかれた牛が足を滑らせてこけていたのです。体は糞がついて汚れ、なかなか立ち上がることができず、危うく別の牛に踏まれるところでした。高校入学時まで持っていた、おとなしくしていていつも「ぼーっと」しているという牛のイメージとは全く違った姿にしばらく私はその場を動くことが出来ませんでした。牛の中にも強弱があり、力比べをして怪我をすることもある。「ときにはその怪我が牛はもとより酪農家にとっても命取りになることもある。」今から思えば、この衝撃から私の夢は始まったように思います。

「酪農家になり、牛たちと共に生産した牛乳を消費者に届ける」これが私の夢です。私は酪農家の子供でもなく、家には牛を飼うだけの土地も基盤も全くありません。「動物、中でも牛が大好き。」その気持ちで高松農業高校の畜産科学科に進学したけれど、入学時には「将来酪農をする」といった思いもなく、「大好きな牛と毎日接しながら高校生活を送れるなんて最高!」といった軽い気持ちでした。高校生活を送るうち、入学直後の実習での衝撃も薄れ、「牛ってかわいい」という思いで毎日牛たちと接してきました。2年生からは、酪農を中心に学んでいく、「大家畜」を専攻し、朝6時過ぎに登校して、牛の世話をし、その後授業。放課後は部活動である吹奏楽の練習を行った後、牛舎に足を運ぶ。そんな毎日は満ち足りたものであり、私が高校入学時に思い描いていた高校生活がそこにはありませんでした。

2年生の1年間もあっという間に過ぎ、3年生へ。そろそろ具体的に卒業後の進路を考えなければと思っていた3月、春の共進会がありました。出品牛が決まりみんな黙々と準備を進めていた時、出品予定の牛の足が少し腫れており、引きずって歩いている事に気がつきました。共進会は欠場。軟膏を塗ってみたり、人間用の湿布を使ってみたり、先生からの指示を受けながら処置をしていきました。しかし、腫れが少し落ち着いたと思った矢先、新たに大きな腫れができていました。これは元々腫れていた上に何らかの衝撃を受け、腫れが大きくなった様子でした。同様に処置を続けたものの腫れは引かず、やがては搾乳室まで歩くことさえできなくなり、体は日に日にやせ細っていきました。毎朝バケツでの個別搾乳、獣医さんに診察してもらっても治ることはなく、結局淘汰することになりました。私は何もしてあげられることができず、牛に「ごめんね。」と一言言うことしかできませんでした。彼女はとても優しい牛で、愛嬌のある顔で皆をいつもいやしてくれていました。

守ってあげられなかったこと、治してあげられなかったことが申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。そんな中、ふと、もう一つの個別ストールをみると、1頭の牛が落ち着きのない様子で動き回っていました。おなかに子どもを身ごもっていて予定日まであと3日。その牛は次第に座り込み、体を横にして痛さを訴えるようになり出しました。出産の始まりです。やがて、陰部から足が出始め、無事にホルスタインの雌を生んでくれました。母牛の顔はとてもぐったりとしていて疲れ切った様子でした。

1日で淘汰していく牛の命と分娩をして新しく産まれた命の両方に立ち会い、どこか複雑な思いを抱くと共に、ある決意が生まれました。今ある命、これから産まれてくる命を守ろう。ケガや病気で牛を傷つけないように、淘汰しなくて良いように…。乳牛の病気は、足ばかりではなく、ケトージス、第4胃変位、後産停滞などの病気になる牛も多く、注射や、ひどいときには開腹手術も必要となります。本校の牛が第4胃変位と診断されたとき、獣医さんは牛の横腹をメスで切り開き、そこから手を入れて、中の胃を外に出してぐちゃぐちゃにしたかと思うと、おなかに戻していきました。治療のためとはいえ、とても大きな苦痛です。「現在の高能力牛の飼育では、こうした病気のリスクが非常に高く、実際にたくさんの牛の治療に当たっているんだ。」とその時獣医さんが話して下さいました。

私たちが毎日何気なく飲んでいる牛乳。その牛乳生産の現場にはこうした現実があることも身をもって経験しました。そして、共進会で出会った酪農家さん達は、毎日この現実と戦いながら、生産性と共に、牛たちを健康に飼うことに情熱を注がれていることがよくわかりました。こうした経験を通して「牛が好き。」「牛がかわいい。」だけだった私が「牛の為を思うのならどう飼育をするのがいいのか」と考えるようになりました。そして、「酪農家になりたい。牛が笑顔で生活し、その牛が与えてくれた牛乳を消費者が笑顔で飲んでくれる。そんな酪農をしたい。」と思うようになりました。振り返ってみると、その思いの始まりは、まぎれもなく高校入学直後の実習で見た、あの衝撃から始まっていたように思います。

私が目指す酪農。それは、生産性よりも牛の健康や本来の姿を重視した酪農です。本来牛は自分自身の子供を育てるために牛乳を生産する。私たちはその牛乳を少し分けて頂く。その大原則に立ち返った酪農です。もちろん牛をペットとして飼育している訳ではないので、生産性を完全に無視するわけにはいきません。相反するように思えるこの2つを車の両輪のように行う酪農。これこそが私の目指す酪農です。「そんなこと机上の空論だ!!」と誰もが思うかもしれませんが、しかし、私は、古くからこの日本で行われてきた酪農と現在の技術が融合すると共に、生産者と消費者とのネットワークもしっかりすれば実現可能なのではないかと考えています。基本はつなぎ牛舎。私が住む岡山県は、中山間地域が多いけれど、牛が分け入ることすら出来ないような険しい山は少ないです。こうした山際の一角に

10～30頭程度のつなぎ牛舎をつくり、そこで牛は個別の管理を徹底する。一方で、育成はもとより乾乳牛や泌乳後期の牛達も山に放牧する。つなぎと山地酪農を融合した酪農です。山々を歩き回り、野芝を食べるとともに、つなぎ牛舎では徹底した個体管理と栄養計算に基づいた飼料給与を行う。そうすることで、足腰が強くなると共に、周産期病の予防にもつながると考えています。しかし、問題点も多く考えられます。何よりも、生産性の問題です。乳量増と作業効率を考えると、フリーストール、TMR方式がベストなのかもしれません。この方式だと個体乳量も少なく、作業効率も悪くなるでしょう。その生産性の問題は、「徹底して無駄を省き利用できるものは利用する。そして、ナイトミルクのような高付加価値牛乳を生産する。消費者を招き、牛とのふれあいイベントを通じて、この牛乳の魅力を知ってもらう。」といったやり方で解決できないかと考えています。次には、実際にそのような酪農をどこでするのかといった問題です。私には、経営基盤は何一つありません。また、私が住む岡山の地には北海道のような広大な土地もありません。私は、中山間地域の耕作放棄地の利用ができないかと考えています。手入れができず荒れた山林や耕作放棄地に牛を放牧する。柵などの初期投資は必要となりますが、大きなフリーストール牛舎を建設する費用を考えれば安くできるのではないかと甘い考えを持っています。そして最後に何よりも大きな問題であり、私の夢を実現する一番のポイントは人とのネットワークだと考えています。土地、施設、費用、技術、流通から消費に至るまで、人と人との繋がりが重要であると思います。農協のシステムもその考えから生まれたと授業で習いました。また、少し前にはやった「農ガール」も人との繋がりに広まっていったものだと思います。私は「酪農ガール」を目指します。

私が「酪農ガール」になるための第一歩として、高校卒業後の進路は大学進学を考えています。大学で知識と技術を学び研究し、そして多くの人との繋がりを身につけたいと思っています。目指すは「酪農の夢ネットワーク」です。志望校も既に決めています。その大学を選んだ理由は、私が高校1年生の時に読んだ「酪農の夢」にあります。その作品を書かれた方は、資源循環型酪農を目指し、飼料自給率の向上を地域とともに行う酪農を夢見て、現在は大学院に進学して更なる研究をされていると聞きました。その大学で私も学び私の夢を実現したいと考えています。私が学ぶ高松農業高校畜産科学科は一クラス40名です。農業の専門高校ですが、残念ながら現在酪農家の子供は1人も居ません。しかし、酪農を目指す仲間や酪農に関わる仕事をしたいと考えている仲間は多く居ます。その仲間達との繋がりがやこれから出会うであろう多くの人たちとのネットワークを大切に、牛にも人にも優しい酪農を行いたい、これが私の「酪農の夢」です。